氷石

久保田香里作　飯野和好絵　くもん出版

天平九年、平城京では疱瘡（天然痘）が流行していた。この病で母を亡くした少年千広は、遣唐使として国を出て、学問をつづけるため唐の国からもどってこない父に反発しながら、にせ護符やまじない札を売って暮らしていた。

そんなすさんだ生活をおくる千広だったが、貴族の家で下働きとして働く身寄りのない娘、宿奈との出会いによって生きる希望を見出す。そして、施薬院の法師や代書屋の老人に世話になるうち、父に対する思いも変わり、学問への興味をとりもどしていく。